

國
民
皆
兵
談

国民皆童である栄光の美しい国の話ではない。

国民皆兵の話である。

今では古い、近代主義思想のひとつだ。

先物買いに失敗したことは反省している。私が触れると雑誌のマンガ評に触れてもらえなくなるとかの懸念があり、そのため『ディアボロのスープ』に触れるべきか、少しばかりためらいがあった。しかし、今回、出だしの手掛かりとして触れざるをえない。

なぜなら、『ディアボロのスープ』は国民皆兵の帝国主義国家と、民草に敬われる魔女たちの対決が描かれているように、読めるからだ。この設定は本来のヨーロッパ圏では、魔女の扱いがまったく逆である。

近代兵器の国軍と使い魔を使役する魔女の対決は、一見、兵器対魔術、いわゆる科学対魔法の対立のように見える。

だが私には、ナポレオン軍対軍人階級(事実上の貴族)の編成軍との対決に見える。この場合の軍人階級は大尉や中佐などの軍隊階級、山下清がよく言ったとされる「それは兵隊の位で言えば…」のことではない。騎士や侍といった軍人なために平民よりも高い身分の地位を得た、階級社会の高層にいる人間たちのことだ。

ナポレオンは、缶詰を発明して兵站戦略を見直したことや弾道学を駆使した砲兵術など、軍略家として優れている点を挙げられるが、ヨーロッパにもう一度古代ローマ帝国のような帝政国家を打ち立てたのは、国民皆兵によって軍人の兵力が圧倒的に大量であったから可能であったと、私は考えている。

フランス革命後に民主政治(中央貴族)に反対する勢力(地方貴族)を軍事力で押さえるために、軍隊を強化していくと国民皆兵になっていった経緯だと思われるが、その国民皆兵は軍事政策としてイノベーションだった。軍人階級のみの中世的軍隊を陳腐化し駆逐していく。だからドラッカーは、「経営ができている組織は軍隊と宗教団体だ」という言葉を残したのかもしれない。

国民皆兵の国軍に対して、軍人階級しか兵員を揃えられない国は物量で負ける。負けるとわかって、降伏せず戦わなければならない。それがノーブレス・オブリージュ(高貴なる義務)である。

支配階級は賤なる民のために戦わなくちゃならない。

それが平時に民を支配している口実・エクスキューズになる。

軍人階級はこのノーブレス・オブリージュのために不慣れな近代戦に立ち向かって行かなければいけない。そして、支配階級である以上、軍人階級を増やすことができない。租税で徴収した配分が減るのだ。兵員数を増やせば、強い軍隊ができるのはわかっているけど国民皆兵にシフトしなかったのは、取分が減るからだ。支配階級はどう見積もっても、限られた人数でしか兵隊を揃えられない、それが国民皆兵では将校(この場合貴族階級ではない)すら増やすことが出来ただろう。

国民皆兵をイノベーションと言ったのは、この階級制度を礎とした秩序を乱している点にある。ディスラティブイノベーションなのだ。よく「破壊的イノベーション」と邦訳されるが、「秩序を乱して革新的なことをする」のが正しい意味になる。フランスは市民革命ができたから、国民皆兵をセットすることが可能だった。市民革命が王様も階級制度も乱していくものだったから、親和性が高かったのだろう。

話を戻して仮に、一万人の軍人階級の軍がいて、十万の国民皆兵軍が攻めてきたら、同じ近代兵器を備えていても、兵員数から旧来の軍が不利である。

そのため、ナポレオンを負かした人物は英雄だ。

アレクサンドル一世、クラウゼヴィッツ、ネルソン提督、皆ロシア、プロイセン、イギリス各国の英雄たちである。地の利はあるが、少ない軍人階級の兵員を駆使して、なんとかナポレオン軍の猛攻を凌いだのだから、英雄視されるのも当然だ。

それでもナポレオン軍と戦ったヨーロッパ各国は国民皆兵にシフトしていっただろう。ナポレオンが幽閉先から脱出して再起を図ってきた頃には、半分国民皆兵の軍隊を連合軍は組織できたと、歴史資料から裏づけはとっていないが、推論される。つまり近代主義を受け入れざるをえなかったのだ。

『風雲児たち』でも、「ナポレオン伝」を翻訳するのは重要だ。軍人階級の武士だけでは、国民皆兵国家の海外の勢力と戦っても負けてしまうことを、学ぶことになる。村田蔵六時代の村田蔵六が大村益次郎が国民皆兵思想の人物に一時学んでいたのがクローズアップされるのも、当然だろう。

裏取はしていないが、ベートーベンの「交響曲第九番」は、貴族階級の軍隊ではなく、国民の軍隊を作ろうというスローガンがあるかもしれない。これを批評・評論でとりあげる場合、根拠となるモノを示さなくてはいいけないが、それは残念ながら用意できなかったことを先に言うておく。

しかし、手塚治虫『ルードウィヒ・B』を読むと、国内ではナポレオン軍の猛攻を受けているオーストリアのウィーンを舞台とし、オーストリア軍の将校は「貴族の我らが、平民の集まりに負けるはずが無い」と、一字一句同じではないが同じようなことを言っている。

解釈の範囲内で裏づけの無い推論にすぎないと断っておくが、ベートーベンは貴族から恩給をもらいながらも、「国民皆兵の軍隊をオーストリアも早く作った方がいい」というメッセージを訴えたかったのかもしれない。

「火花散る」が戦火を差し、「皆兄弟となる」のも国民国家の社会では、理想として氏族民族・階級制度を越えて、同じ軍隊となる共通の家族（この場合国家）の兄弟というのを高らかに宣言する。

この解釈を進めると、ある国民国家が旧世界を統一に導くという予想、その予想の先には石原莞爾の「最終戦争論」があり、全世界がある国民国家のリヴァイアサンの元に兄弟となる……当時はナポレオン軍のフランスが急先鋒にあって、オーストリア軍も早くそうなってほしいなあという願望があったと思える。

ともかく、ナポレオンと国民皆兵でヨーロッパが近代化していくのは歴史上の事実であり、これをナポレオン旋風というのは、間違っていないと思う。（こういうことを書いた後に「ナポレ

オンがいなくても欧州が近代化するのは必然だった」という第一次資料が出てくるのが歴史の面白いところ)

日本の近代化は、この国民皆兵を軸に理解しないと、

- ・ 主権在民
- ・ 民主主義
- ・ 三権分立

が理解できない。

近代化には、民族自決という言葉が出てくるが、民族自決でいろいろな選択肢がある。「自死を決める」の自決ではなく「自ら決める」だから、共産主義や社会主義などの革新思想を背景としたものから、封建制からある程度階級制度を残しながら立憲主義になるシフトなどがある。

そのひとつに主権在民がある。

単純に主権が王から、民に移譲される。この民が国民なのか、人民なのか、はたまた皇民なのかが、問題だ。

とりわけ国民国家となったら、字義にある「自らが決める」ように、代議員制度で国軍が「どこの国と戦争するのか、あるいはしないのか」を決めるシビリアンコントロールのために、投票する。簡潔にまとめすぎるとそうなる。近代以前の軍隊はノーブルコントロールだったのである。(だから軍人階級が存在した)

このため、徴兵制度が成人男性しかない近代国家に成り立ての国では、投票権が成人男性にしかなかったのは、戦場で戦う兵役が課せられているためである。国民皆兵国家では、投票権の代償に徴兵義務なのだ。ただ、日本では税金をある程度払っている男性しか、投票権が無かった頃もあったと聞く(少し調べないといけない)。

これが大戦という二度の銃後経験により、成人女性も投票権(参政権)を得る。(おおまかに欧米は第一次後、第三世界は第二次後というくくりであろう)

総力戦となったら、女性も男性もなく戦場に駆り出されることになるからだ。たとえ「銃の後ろ」に控えていたとしても、戦場のような窮乏生活を強いられていたから、シビリアンコントロールの権利は当然得られるものなのだろうと、考えるのは当然だ。

これは民主主義が根付いたともいえる。

民主主義となっても、絶対王権制のような独裁者が国家元首では、国軍が「王の私兵」となっている中世時代と変わらない。

ここで「フランス生まれの三つ子」、三権分立が出てくる。

絶対王権では行政も司法も立法も、全て国王が持ちえていた当然の権力だった。そもそも、絶対王権とは三権を統一された権力のことを指すはずだ。歴史的にはイギリス国教会の長はイギリス王みたいに、政教一致したときに絶対王権に集権化されたのが、正しい用法だろう。

ともかく、気に食わない奴はバステューユ牢獄に入れることもできる絶対王権では、国民皆兵に制度変更できない。ただ、日本の場合、王政復古で「絶対王権」を持っている徳川幕府の将軍から大政奉還し、その後の立憲君主制度に繋がる。

これは王族が存在しないアメリカみたいな国のように、すぐに階級制度社会を無くすことは、

急進的過ぎてできない。近代化に軟着陸(ソフトランディング)するためには、こうした過程を踏まないで、倒幕軍と幕軍の国内出血だけではすまなかつたろう。幕軍内の旗本は、徳川将軍家の私兵であった。たいして、国民皆兵を目指している討幕軍は江川太郎左衛門の思想にあるとおり、武士階級だけでなく土農工商の「農」兵が混じり、近代戦を展開すれば勝ちは見えている。(余談として徳川親藩である福島出身の新島八重が倒幕軍が作った帝大のアンチとして同志社大で教鞭をとっていた…と考えるべきか?)

再びナポレオンに話題を振れば、ナポレオンがやりたかったことは「帝政復古」ではないか? だから古代ローマ帝国から神聖ローマの流れを汲むオーストリア帝国の皇女を後にしたのは、ある種の「元老」になぞらえられる複数の王族たちに認められたディレクトール(ローマ皇帝)となり、近代ヨーロッパにローマ帝国を蘇らせる…逆に言えば帝政以外にヨーロッパ全土(旧世界)を統治する術が無かつたのだろう。(そもそもナポレオンはラテンのようだ)

ナポレオンは反ナポレオンの連合国と対立して失脚したが以後、この流れがプロイセン主導でドイツ統一後にビスマルク憲法、つまり立憲君主制を導入した近代国家の誕生に繋がると思われる。もちろん、伊藤博文がこのドイツに留学して法学を学び、大日本帝国憲法の参考にして、日本の立憲君主制を成立させたのは、言わずもがなである。

フランスで言えば急進共和主義のジャコバン派に対して、立憲君主主義(たぶん皇帝教皇主義の延長線上にある思想)のフイヤン派が、日本では政治的にも軍事的にも勝利を治めて明治維新となったと、まずはいえる。

それは敗戦によって日本の近代化は間違っていたと全否定される(つまり明治維新が間違っていた)が、大日本帝国憲法を改憲した現行憲法の象徴天皇制は立憲君主主義から一旦離れてはいる。しかし『ヘンゼルとグレーテル』の森に迷わない置石のような存在になっている。象徴天皇制を辿っていけば、立憲君主主義に「帰宅する」ことはできる。

主権在民だから、国民の過半数が願えば、立憲君主主義に戻ることはできる。逆に言えば、コミュニケーション主義者(見たい主義者や自分の気持ち至上主義者やキャラ主義を含む)が過半数になれば、日本で「易姓革命」が可能になる。現にコミュニケーション主義の側にいる岡田斗司夫は「皇室は現世代のみ給金を払って、後の世代は自活してもらうのが適当」と語っている。

こうしたことは国民が選ぶことであって、私が選ぶことができればいいが、それはできない。立憲君主制に戻ろうという思想信条の政治政党を結党まではできるだろうが、そこから先に代議員として数を揃えるのは難しい。

書いてあるレジメを読むように書くが、表現の自由として、「皇族が保たれること、それは日本文明圏に大きな礎(究極的実体)が保たれることと等しく、文明圏としての日本の存続に関わる」から「女性天皇ひいては女性宮家の創設は歴史を鑑みても、良し」「天皇の人間宣言を最大限に利用すべし。なぜなら男子も女子も等しき人間であるから」と主張しても、こんなのはまったく影響は無い。前述の通り数が揃うはずがないからだ。

先行者がいるのだが(宮台のこと)、日本は「藩民自決」して皇民国家になった。「藩民自決」は民族自決的な自ら決めることではなく、藩民の自決である。藩主の臣民である藩民が死んで、天皇の臣民である皇民になったのだ。ビスマルク憲法の影響下にあるのは当たり前で、ウィル

ヘルム一世二世ともに皇帝だった。君主となる皇帝の臣民、大日本帝国の版図にある国の民は、皇民になる。

沖縄県民は本土との距離はあるし、そもそも琉球王朝が統治し大和朝廷系統の氏族でもないが、皇民になろうとした。

近代教育は国民皆兵のためにあるが、戦前の日本の近代教育は国民皆兵の「事前演習」の国民化教育ではなく、皇民化教育だった。これは立憲君主制度の国では当たり前。国民皆兵ではなく、皇民皆兵である。

まあ、他の立憲君主制度の国だと、「帝民皆兵では？」と言いたい気持ちはわかる。

ここで問題は「ホリケンのずんずん調査」の人が書いた『ねじれの国』の話題になる。私もこのことに触れるのがイヤで、胃が痛くなる。

日本人は基本的に日本文化を絶対評価している。しかし、国際的な立場をとる相対評価では、そうはいかない。たとえば、中世からの皇室制度や将軍を掲げる幕府を、ヨーロッパの皇帝教皇主義のようなもの、つまり将軍天皇主義という似たものとして捉えることは歴史学上では、できる。

だが、これを聞いた日本人は反射神経的に「違う」と思う。

皇帝教皇主義と将軍天皇主義がどれくらい似ているのか、それとも似て非なるものなのか、具体的な論拠などは関係なく、「違うんだよなあ」と、勝手に思う。同じ絶対王権制批判をかわす政治形態であることは、否めないだろうに。

そもそも、古代ローマ発祥のカエサル家の血筋と、皇室の血筋はどれほど違うのかを相対評価したとき、日本人のアイデンティティーみたいなものが揺らいでしまう。そのため、あまりこの点については知っている人はいたけど、あまり語られてこなかったはずだ。それは「国体を相対評価するなんて、非国民のやることだ」ということになるのだろう。（とはいえネロでユリウス氏族は絶えているらしいし、カエサルの末裔とハプスブルグ家は自称しているだけである）

事実、私は天皇機関説よりも危ういことを語ることもある。

世が世であれば、テロ行為をされてもおかしくない。しかし、現在ではそんなことにはならない。

このような事態がすでに国体（究極的実体）崩壊に流れが向かっている気がしてならない。今の事態は民族が失効しつつあり、国家主義の国民になるのかというと、そうではなく国家にも帰属しない大衆が出来上がりつつある。

大衆は国体にさして何も関心が無い。

そうして、国民皆兵にも関心が無く、彼らはなににもよるべがないので、戦争はできない。大衆によって必然的に武装解除され、国民皆兵論も終わる。

世界史や日本史の授業をちゃんと聞いていれば、「んなこと中学生の頃に聞き飽きたよ」と煙たがられることを私は書いてきた。

もしそうならないとしたら、教える先生が悪いと思う。

ちゃんと国民皆兵を教えられていない可能性がある。

現代社会では、職業軍人以外は戦わない国民皆兵の近代国家ではないから、王政もいいのではないかという、甘い考えも持ってしまいがちだ。

マルクス主義の階級闘争の視点では、絶対王権の危うさを見抜けない。それはむしろ逆で、ハーバー・ボッシュ法で化学的に固形窒素を増やさないで伝統農法を破壊したから、東側諸国では飢饉が起こる。矛盾するようなことを書くかもしれないが、伝統農法でうまく飢饉を起こさない方法論を「帝王学」として学んでいなかったということでもある。（それは国民皆兵を理解していない現代人と重なる）

話が逸れてしまった。

現代社会が王政に帰るのは、残念だかもうできない。

だからこそ、フィクションとしての王政に憧れを抱ける。しかし国民皆兵の近代国家自体も、これから時代が進めば、フィクションからファンタジーになってしまうかもしれない。

『ディアボロのスープ』の作品内容には、触れないようにしていたが、女ナポレオンが出てきて、ハチヒメがそれに対抗する「対国民皆兵国家」の元首になる……みたいな懸念も、表現されている。それは日本の幕末期の写し絵でもあるのだが。もう、連載は終了しているが。

付記

自分を「アイヌ民族」と自称する日本人を黙らせるには「あなたは天皇を敬愛しているか」と質問すればいい。

日本神話から連なる天皇を敬愛する「アイヌ」なんて、アイヌ民族のはずがない。アイヌ神話から連なる固体である自分は、他民族の王として天皇に礼儀作法をもつてもてなして振る舞うことはあっても、愛して敬ってはいけない。

アイヌ神話から連なる何らかの究極的実体を敬愛するのが、アイヌ民族だ、それなのに同時に天皇も敬愛したら、民族の自己同二性、精神分裂と精神科医は診断する。

民族を失効して国民となれば、天皇を敬愛しても良し。これは日本に帰化したあらゆる外国人にもいえる。

アイヌが民族的なアイディンティーを取り戻すには、イヨマンテの儀式をしないとイケない。これはクジラ漁をする日本人と同じで、クマがかわいそうなんて言うのは、アイヌ民族ではなくただの近代人だよ。他にも顔にイレズミやアイヌ語で日常生活を送るなど、近代化してもやらないとイケない。そうでないと魂を民族に繋ぐことは出来ない。それが出来ないと肉体的な「容器」はアイヌでも、中身はもう日本人だ。

それは我々にも照り返される問題だ。

日本民族自体が保てなくなっているような、そんな事態になっている気がしてならない。事例は控えるが。

『セカイ系とは何か』

中村うさぎさんの週文のエッセーを読んだり、読まなかったりしているのだが、たまたま読んだときに『セカイ系とは何か』の作者が「真剣10代しゃべり場」に出演していた前島クンだと知って驚いた。前島クンはテレビの「真剣10代しゃべり場」の第一期生である。

それで、ちょっと読んでみて、青くなった。

「中間項」にまったく触れられていないからだ。この「中間項」をきちんと説明できないと、「セカイ系物語」の出現の説明をできない。

私が老婆心から「中間項」を説明すれば、地域コミュニティや近代的国民国家が「中間項」だ。つまり、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』にあるように「国民国家の誕生が近代文学を生んだ」。その近代文学とは何かというと、「大きな物語」だ。日本は明治維新で近代的国民国家を作り、第二次世界大戦で近代化に挫折した。ジャン＝フランソワ・リオタールが言うように「大きな物語の死」を迎えた。しかし、日本の場合続編が作られた。それが戦後復興を目指すもので、「続・大きな物語」といえるような国民共通の物語を夢見ることができた。いろいろ事件があって、三島が「このまま経済発展ばかりしていいのか？」と真のナルニアに旅立つみたいに真のニッポンに旅立ってしまうようなことが諸々あって、最終的にこの「続・大きな物語」はバブル崩壊で死を迎える。文芸評論的にいえば、ここまでが日本近代文学の寿命だった。

この時点ですでにポストモダン文学が出てきたけど、残念ながら支持されたのは『新世紀エヴァンゲリオン』を筆頭とする「セカイ系物語」だった。ポストモダン文学は一部の文学者に支持されたが、大衆の支持は得られなかった。

民族、国民、大衆がオタク三世代に対応する。オタク第一世代は民族を基盤とするから貴族主義であり、オタク第二世代は国民的だからエリート主義であり、オタク第三世代は大衆だから主義主張を持ち得ない（岡田斗司夫さんの『オタクはもう死んでいる』で書かれていること）。しいていえば、見た目主義やコミュニケーション主義だ。余計なことを書けば、このコミュニケーション主義が学習院まで浸透して、氏素性のある愛子様を「グズなヤツ」と断定していじめることを可能にした現代思想に根ざした「易姓革命」である。

第一世代は民族だから作品を神話などの民族の生まれてきた物語を見る（古典・中世文学）。第二世代は国民国家になるための苦闘の建国史としての物語を見る（近代文学）。第三世代は民族でも国民でもない動物化した大衆だから、本来中間にあるはずの民族機構や国家という「中間項」をすっとばして、国際や地球などの世界級につながる物語、つまり「セカイ系物語」を見る（現代文学）。

さて、純文学が近代文学にトドメを刺すのは、綿矢りさの登場まで待たなくちゃならなかった。その間に「セカイ系物語」はマンガやライトノベルで隆盛を極めて、揶揄されるようになる。逆に揶揄されることで、大衆に浸透と膾炙されたことの証明となる。

ここで近代文学の後進には、ポストモダン文学ではなく「セカイ系物語」が選ばれた。『ゴーストキャッチャー』でも書いたが、高橋源一郎は庵野秀明を遠くから見かけて、羨望のまなざしを向ける。なぜなら、近代文学から渡されるはずのバトンが自分の側（ポストモダン文学）ではなく、庵野監督の「セカイ系物語」であったのだから、文学者として高橋は監督に負けたのだ。言語芸術家として敗北を悟ったから、庵野に羨望を向けている。先見性は缶コーヒーを「ごきゅごきゅ」一気飲みするカントクちゃんの方にあっただの。今では館長といった方がいいか。文芸評論家としては、プロデビューできなかった人間でも、このぐらいのことは書ける。問題を元に戻そう。

「中間項」を地域コミュニティや国民国家として捉えて、それを読者に踏まえさせないと、個人とセカイが繋がる「セカイ系物語」を説明できない。「大きな物語」が失効したから「セカイ系物語」なのだが、『セカイ系とは何か』は評論家たちの内ゲバばかり扱っているようである。前島クンが心配だ。

記憶に間違いがなければ、「しゃべり場」に出ていた学校に行かず旅して当時役者やってた子が、「中間項」のことを説明しなかったり、できなかつたりしたら、別に驚かない。青くもならない。

「中間項」である国民国家自身が作った義務教育を受けて、中期高等教育の高校に通い、大学に進学した前島クンが、「中間項」の説明をしない、あるいはできないのは、まずくないか？

「中間項」が自分自身を教えることができない義務教育（ちょうどゆとり教育の時期にあたるか？）の崩壊を見ている気がする。（「国民皆兵の話」を本書に収録されているのも、この点に関わるからである。普通、こんなことあえて書きませんよ。奇術師がマジックのタネ明かすようなことだから、「ゴミ箱をあさるんじゃねえ！」）

普通、アカデミズムやそういうところにいる人は、私が知っているぐらいのことだから、当然理解している国民国家などを、前島クンに教えないのか？ ちゃんと注意してくれる先輩や、彼に気を配ってくれる大人がいるか、心配だ。

出版的にも心配だ。

編集者が「『中間項』を説明しないと『セカイ系物語』を説明できたことにならない」とサジェスチョンすべきだし、前島クンが「中間項」を理解していて説明できて、その上で「東京大阪間の新幹線で読み終えるくらいにしてくれ」と言われて文量を減らしたなら話はわかるが、そうではないとしたら、編集者の見識を疑う（つまり文学史を理解していない）。

それにしても、うらやましいね。

この書籍が出版できたのは前島クンが有名人だからで、アイドルが出す中身の無い本が市場で買われるから、内容がともあわなくともいいのと同じなのだ。

私はプロフィール通り、「有名人の悪口を言う人」だから、こんなことを言ってもいいのだ。

『セカイ系とは何か』の書評で、オタク三世代を「民族と国民と大衆」と割り振ったけど、それぞれが違うものなのだが、混同しやすい。私自身ちょっと民族主義とナショナリズムが同じと思っているところがあった。

厳密に言うと違う。

民族はエノトスとかエスニックで、国民はネーション、大衆はポピュラーなどである。

民族	エスニズム	→	ノーブレス・オブリージュ	貴族趣味
国民	ナショナリズム	→	エリート主義	選民趣味
大衆	ポピュリズム	→	コミュニケーション主義	見ため趣味

矢印の向こうを趣味としたのは、実際の貴族ではないし、選民でもない。そして、見た目主義者であっても、多く外見上優越性を持った勝者ではない。ただ、オタクの中にも祖先を遡ると大名だった人、京大東大卒の人もいるし、美男美女もいるだろう。このような「少数派」は誤差にくくるしかない。彼らを母数に入れてしまうと、日本の貯蓄額の多さのような偏りが出る。

何十億も貯蓄がある人も含めて平均を出すと、日本人は平均2000万に届こうかという貯蓄があることになってしまう。そのため、彼らを母数に入れてしまうと、狂いが生じる。

大澤真幸の本『帝國的ナショナリズム』には、“（前略）それを媒介にして結合する共同体・共同性は、当事者たちによって、しばしば<民族>や<部族>のような<原初的共同体>に見立てられている”と、書かれているが、岡田斗司夫さんがオタクを民族と表現したのは、これにあてはまるのではないか？

“それ”の部分にオタク趣味のジャンルをあてはめると、<アニメ民族>や<アニメ部族>になると、大澤さんは言っているのでは？

だから、アメリカで出会ったミリタリーが氷川神社を爆撃できないのは、<アニメ民族>だからという岡田さんの説明は一応、理屈は通る。そんな単純じゃないと思うが。

説明不要だと思うが、一応説明すると、セーラーマーズが「好きで好きでしょうがねえ」アメリカ人が軍隊に所属しているため、日本に爆撃命令を出されても、「氷川神社があるから爆撃できない」と語ったのである。

情けない。

こんな連中を集団的自衛権で助けに行かなくてはいけないのか…

それはそうと、民族や国民で主義主張が、共和党支持か民主党支持か、主義主張が違う。

平氏で垂直志向、源氏で水平志向のように、国民は恋愛至上主義で、大衆は友情原理主義。（大衆はフードライト、国民はフードレフトなのか？）

民族は氏素性が大事なのだが、ちょっとあてはまるものがない。支配階級は垂直志向で自分の血を残すことを考え、民草（被支配階級）に管理しやすいように水平志向的な考えを押し付けているのかもしれない。自分たちは政略結婚だが外で恋愛をし、賤民に対しては友情を説いている

というのが、中世期の日本文学を読み解くと出てくる可能性がある。

それと、氏神というタームを持ち込めば、オタク民族の説明がつくことがある。ミリタリーや特撮やSFを個別に氏神にしていた時代は、彼らをマニアと呼んでいた。氏神を祖先神に持つ氏族グループである。引用文のカッコつきの部族は、この氏族にあたるだろう。日本史を知っていれば、氏族間対立があったように、ミリタリーマニアの人はどこかで特撮マニアをちょっとなんか（含むところが）ある。それは特撮マニアがミリタリーマニアにも同じところがある、逆も然りだったはずだ。

それを80年代あたりで聖徳太子が仏教を取り入れて、氏族政治によって起こる氏族間対立を無化しようとしたように、マンガとアニメで「和をもって尊しとなせ」をやって、オタク民族になろうとしたのではないか？ マンガが小乗（ミナ坊が言っているように読者は少数民族）で、テレビアニメが大乗の仏教。仏陀以外の菩薩様や四天王はフィクションのキャラクターである。結果はマニア氏族とオタク民族の対立は無化（オタクがマニアという言葉で駆逐）したが、その後はうまくいっていない。

その後のオタク民族とオタク国民対立、オタク国民とオタク大衆の対立は、たぶん解消はされないだろう。マンガがお経（書籍）で、アニメが仏壇（テレビ）の仏具的なモノが、揺らぎ始めた（求心力を失う）頃にインターネットが現れて、彼らが認知されていくと同時にうまくいかないことが表面化し始めた気がする。

これらは裏づけがある程度必要なのだが、その経緯変遷がわかる資料などを持たないので、ある程度は予断もあることは告白せねばなるまい。

話題を変えれば、実は古代ローマでこういう問題はやりつくしている。

共和制や三頭政治、帝政に専制君主制など、やっていないのは20世紀に入ってから共産主義・社会主義体制ぐらいで、あらゆる国家体制を試している。だから教養を得るために古代ローマを学ぶのは、正しい。

したがってニーチェの永劫回帰、オルテガの『大衆の叛逆』である。

古代ローマの予備知識がないと、『大衆の叛逆』を読んでも内容がよくわからないが、大衆の問題は紀元前の頃から根が深い。

この大衆の問題をなんとかするために、専制君主が生まれたのだろうか？

教養として古代ローマの知識がないと、「論文の中のたとえ」がわからない。たとえば「最大多数の最大幸福」のベンサムは五賢帝時代の治世が一番ローマが安定繁栄していたから、賢帝が続べる国家が理想形で、それは最大多数の最大幸福が導かれているからと、結論したのである。

これをマンガに描いたのが須賀原さんの『うああ哲学事典』で賢帝ロボが結局何も決められなくなり、アニメでは『サイコパス』のシビュラシステムが賢帝ロボとして機能しながら、免罪体質にはまったく機能しないことになっている。つまり、古代ローマの話題に戻れば、専制君主が賢帝であれば、何も問題が無いということになるが、そんなに大衆は甘くない。

予防戦争の論理（この言葉を聞くと古代ローマ好きが喜ぶ）で、他国を侵略して橋頭堡を築いて防備を固めればいいのに、好戦論が大衆世論で支配的だと打って出てしまい、せっかく築いた橋頭堡を敵に明け渡し、逆にイタリア半島進出の足がかりを踏ませてしまうような。イベリア半

島から遡って、ブレヒトの戯曲「ハンニバル」の「イタリアには太陽がある」だよ。

まあ、こんなマニアックなこと、演劇ファンでもわからないよ。

国内上演が一度あるか、ないかだ。ブレヒトで再演されるのは「三文オペラ」と「肝っ玉母さん」ぐらいだ。筒井康隆さんの『馬の首風雲録』の種戯曲が「肝っ玉母さん」なんだけど、それを触れると話がブレる。

話を戻すと、たとえ賢帝でも衆愚によって「最大多数の最大幸福」が導けないことになってしまい、もしかしたらオルテガはそのことを書いているかもしれない。（「大衆は賢帝を愚帝にする」とか）

だから、結論として古代ローマを教養として学ぶのは、正しい。

ただ過去の分析にはなるが、未来の処方箋になるのかは、わからない。総称としてのオタク族の対立解消ができないと前述したのは、このためだ。民族か国民か、大衆か、それとも社会構成員（注・社会主義国家の民）なのか、なんとなくどれも正解ではないような気がするが、オタク第三世代が消極的、あるいは無意識にいつの間にか「自ら決めずにデフォルトの名前を選ぶ」ように、大衆になってしまうのだろう。

そのとき、永劫回帰が正しいなら、古代ローマのように、必ず崩壊する。それはまず、共和制の古代ローマ帝国を範にしたアメリカ合衆国がまず崩壊する。宗教的な事情で西と東に分かれたローマ帝国のように、北と南で分かれるかもしれない。古代ローマに属州があったように、日本がアメリカの属州のような立場に置かれた状況の今（ローマの戦争のために兵力を徴用される集団的自衛権）だが、そのときに日本は民族に帰るか、国民をとり戻すか、大衆として滅びを選ぶか、真の自決（国内民が自ら決める）が迫られる。

おそらく、今の国情では間違いなく「最大多数による最大愚行」が導き出されるだろう。

こういうことを言う人をおかつて経世家と呼んだが、そういうふうな指摘をする人を「とんと見かけなくなりました」。

多分アイドルも、オタク民族には宗教アイドル、オタク国民には政治アイドル、オタク大衆は商業アイドルを求める傾向があるのかもしれない。仏教は偶像崇拜ありだから。